

写真は十日町本町通り。まず、雪壁の高さに驚く。左下には商店の看板と障木が見える。高さは約8メートル。どこか、一番高い所と、屋根のてっぺんにはしごを渡し、コーシキをさし長方形上に切り抜いた雪の塊を運んでいる。父の勇次郎さんは明治42年生まれ、水道の技術屋で十日町でも働いてお

昭和の アルバム

り「父が撮った写真。なんだか、でかいアスキャンデューを運んでいるみたいだよな」。

除雪体制が整っている現代と異なり、商店街は雪のやり場がなく、次々に積み上げ、次第に高くなっていかざるを得なかったといふ。「ダンプも重機もない、流雪機もないからしようがなかったんだらう。毎日積み重ねてこんが高さになるほど、雪が降った年だったのかな」。雪壁の下には、背負い籠に雪を貯め運んでいる住民の姿も見える。「その籠(背負い籠)も住んでいる土地でちよつとずつ形が違っていた。みんな自分で作ったから、差が生まれたのかな」。豪雪地の雪掘りの一コマだ。



十日町本町通りの雪掘り (昭和初期)

津南町上段 伊林 康男さん (昭和13年生まれ)



雪櫃を使い屋根除雪する市民たち (昭和36年1月、本町通りで、池田友好さん撮影)

毎冬、屋根の雪より一丈たなで犠牲者が出る。命綱使から落下で用や2人以上で作業をどこも珍しく行政は奨励するが、それ毎日新聞でも転落など事故は起きる。最近の雪下ろしは一度に大量の雪を落とせる便利なスノダンが主時代、昭和が遊。雪を乗せた重みに引張られ転落する事故は写真、十且が、その専用コックリでコマ。

雪櫃

